

## 1930年代の教養崩壊

高 田 里恵子

### 1.

中年以上の年齢になると口に出してしまう言葉として「いまどきの若者は……」という嘆きがあるが、しかし、その言葉の凡庸さのほうがいまでは十分に喧伝されたので、これはむしろ代表的な禁じ手の一つになっていると言ったほうがよい。せっかく中年になったというのに、古代エジプトのパピルスのなかにさえ登場するという、この伝統ある嘆きを口にする楽しみも、ついにわれわれからは奪われてしまった。

だが、たとえば漱石は、のびのびと年少者を批判しえたらしい。

新たに発見された夏目漱石の講演から引き出しうる教訓はいくつかあります。その一つは、教師が、自分の在籍していた当時にくらべて、現在の学生の学力は劣っているということを口にしがちな存在だという事実にほかなりません。実際、昭和の一〇年代には、哲学者三木清が大学生の「知能低下」を指摘しています。それが事実か否かはともかく、かつて学力が上昇しているという事実の指摘は、歴史的にまず目につきません<sup>1)</sup>。

これは、蓮実重彦が「東大入試要綱」に載せている文章の一節で、「新たに発見された夏目漱石の講演」と言われているのは、旧制第五高等学校の英語教師であった夏目金之助が明治30（1897）年に行なった講演である。漱石はそこで、高校生の英語力が「低落」傾向にあるのを厳しく指摘しているのだという。漱石ほどの人物を引き合いに出しておきながら、しかし東大総長の言葉は、さすがに用心深く、学力低下、あるいは、われわれの議論のために視野を広げて言えば教養低下を、学生ではなく、年長者たる教師のほうの問題としてとらえている。「現在の大学人やマスメディアは、ほぼ一世紀前の漱石とほぼ変わらぬ口ぶりで大学生の「学力低下」を嘆いていることになるのです。ことによると、夏目漱石は、日本近代の教育制度の中で、「学力低下」を嘆いた最初の人物かもしれません」。

たしかに、言われてみれば、教師（年長者）は、学生たちの能力が「自分の在籍していた当時にくらべて」低下したという話が好きなようにも見える。これから、われわれは話を学力低下と言うより、教養低下に絞っていくが、学力と教養の違いではなく、この「自分の在籍していた当時にくらべて」というのがポイントなのだ。文芸評論家の大塚英志は、こんなふうに言う。

このところ大学生の基礎学力の低下をめぐる議論が盛んだが、ぼくが一連の論議で気になるのはその際の決まり文句である「××もできない（知らない）大学生がいる」という言い方である。そこにはこういう議論を好んでしたがる大学教師たちの「教養」を根拠にした階級志向がどうしても見え隠れしてしまう。なるほど、ある専門教育を受けるためにその前提となる基礎的な知識がある。そのことにはまったく異論がない。けれども「××を知らない大学生」と嘆く人々は、しかしなんだかそういう「教養」のない大学生がいることを喜んでいるようにも思える。知らなければ教えればいいだけの話であって、大学や専門学校で少しだけ教えている経験からいっても教えりゃ勉強するよ、あいつら、というのがぼくの印象である<sup>2)</sup>。

学生性善説を採る大塚の発言に若干ペシミスティックな修整を加えれば、たとえば教養や知性といった、ある種の階級を感じさせるようなものを所有する年長者にたいする、まさしく階級的憎悪を抱く若者や、そもそも教師という他者への最低限の気遣いをもたない学生が、現在の教室に存在しないわけではない、とも言える。

しかし、大塚の視点が重要なのは、ここで浮かびあがってくる本当の問題が、学力低下や教養崩壊というよりも、共同体崩壊であることをとらえているからであろう。教師が学生を自分たちの教養共同体の若い仲間と見なし、学生が教師の信頼を感じとる、そのような特権的共同性の崩壊である。教養とは切りはせない啓蒙という行為、つまり年長者から年少者への伝達行為は、その基盤の上にはじめて成立する。教師の嘆きじたいは、百年前の漱石の時代からあったとしても、現代ではその嘆きの背景となるべき共同体の存在を教師が信じられないために、ついには、彼が、自分には関わりない階層に属する学生の教養低下を「喜んでいるようにも」映ってしまう。

近代ドイツの教養論を扱うアレイダ・アスマンの論考のなかで、「教養の終焉」を語るさまざまな言葉は「時に勝ち誇ったように、時に諦め顔で、時に苦々しく、あるいは陰鬱に語られており、決して中立的ではない」と指摘されている。「なぜならば、ここで思いをめぐらす者たちは、つねに同時に、自分自身の階級の来歴と未来についても考えているからだ」<sup>3)</sup>。大塚英志に従えば、教養低下を嘆く現代日本の大学教師たちは、もはや、かつてのドイツ教養市民層のように思いをめぐらす者ではないということになる。

学生の教養崩壊を嘆く声は、「実際、昭和の一〇年代には、哲学者三木清が大学生の「知能低下」を指摘しています」と蓮実重彦が言っているように、1930年代中ごろに大合唱となった。我が国最初の教養崩壊論議である。しかしその時には、嘆く者たちは、自分たちの特権的共同体の一員となるべき後輩たちの未来に心を砕いていたのだった。たしかに彼らは喜んでいるようには見えない。

と言うより、喜んでいるように見えてしまうことをきちんと怖れた。問題

の「知能低下」論が載った『現代学生論』（1937）の序文で、三木清じんがこう言っているのだ。

我々は寧ろ同じ問題について諸君と一緒に悩んでいるものである。それ故にこそ我々は我々の意見が諸君によって顧みられることを希望する。この書は恐らく諸君に媚び得るものでない。しかし、たとえ我々が諸君を非難することがあるとしても、我々は同時にそのような非難さるべき状態が存在するということに対して我々自身の責任を感じているものであることを承知して貰いたい。もし我々が諸君に対する愛と信頼とを有しなかったならば、我々はこれらの文章を書くことを欲しなかったであろう<sup>4)</sup>。

本編に入ると、論者たちの主張がほぼ一つであることが分かる。いまの学生たちに知識量、勉強量、読書量、それどころか知能が足りないのではない、むしろ昔よりも真面目で頭がいくらいである、彼らに欠けているのは、戸坂潤の言葉を使えば「思想的な情熱」「批判的な読書力」「文化的覇気」であり、これこそが「教養」なのではあるまいか<sup>5)</sup>、と。

『現代学生論』は主に左翼陣営の寄稿者を揃えているのだが、それを別にしても、このように教養をめぐる、エリートと呼ばれる青年が体制迎合的になるか、それとも体制批判的になるかを問題とするのが、1930年代の教養低下論議の特徴なのである。戸坂潤の分析と主張じたいはマトモすぎるくらいであるが、ここで重要なのは、戸坂の視点が現代における教養崩壊の危機には、もはや通用しないことだ。いまでは、教養のない（と言われる）東大生に、君は体制に媚びている、などと叱ってみても、たんにピントがずれた発言になるだけなのである。

2.

「先生、ドストエフスキーって誰なんですか？」

とある東大（文系）大学院生のこの言葉は、東大教師の論考「『教養崩壊』の時代と大学の未来」に紹介されて話題になり、奇妙にスキャンダラスに流通してしまった<sup>6)</sup>。

それにしても、自分の知らないことを堂々と訊いてしまう学生の素直さはたいしたものだ。ひょっとすると大塚英志の「教えりゃ勉強するよ、あいつら」のほうが正しいのかもしれない。

丸山眞男が東大紛争時に学生の「追及集会」に連行され、眼前に座っている文学部の院生たちのあいだから「ヘン、ベートーベンなんかききながら学問をしゃがって！」という罵声が飛ぶのを聞き愕然としたのに比べると、隔世の感がある。「ただ、いかに見知らぬ学生とはいえ、さきの「ベートーベン云々」の言葉に現われているような、むき出しの憎悪の表情にとりまかれたのは、これがはじめての経験である。その「憎悪」はむしろ「期待」に基づくもたれかかりが、つきはなされたところに発している」（傍点原文）と丸山は記した<sup>7)</sup>。

「ベートーベン云々」の言葉に、明らかな階級的憎悪を感じてよいにもかかわらず、丸山眞男は、先生に構ってもらえなくて拗ねている男の子を見ており、この丸山教授の態度のなかに、崩れていこうとする教養共同体の最後の姿を、辛うじて認めることができる。

それにたいして、ドストエフスキー云々のほうはどうかと言うと、××も知らない東大院生は（たまたま）女子学生であったのだが、ドストエフスキーを知らなくとも、『アンナ・カレーニナ』という「不倫の話」はビデオで観たことがあるからトルストイの存在は知っており、また「メディア・リテラシーがあり、サブ・カルチャーについての「教養」は極めて豊富」で、小さなシナリオを書いてオンエアされたこともあるという。ここには、すくすくと育った、屈託無い、良家の女の子がおり、教師にたいする「憎悪」も、

その裏にあるかもしれない「もたれかかり」も存在しない。

本邦初の教養崩壊でも、なぜかロシア文学が話題になった。1930年代の教養論の代表的著者であった谷川徹三は、36年に『中央公論』に載せた論考を、次のようにはじめているのだ。すこし長く引用してみたい。

日日新聞の「傘雨亭夜話」に先達こういう話がのっていた。

『本屋の前に立った二人づれの大学生の一人がいった。

「トルストイって何だっけ？」

それにこたえて連れの一人がたしなめるようにいった。

「露西亞の小説家じゃないか」

前の一人はかさねていった。

「印度にもこんな名まえの奴があったじゃないか？」

それにこたえてあとの一人はもう一度いった。

「あれあ、ヴィクトル・ユーゴーだよ。』』

ここで筆者久保田万太郎氏は言っている。

『読者諸君、親愛なる読者諸君、決してわたくしは「うそ倶楽部」をここまで延長して来たものではありません。ある日、あるときある学生町で、はっきりとわたくしの見、はっきりとわたくしの聞いたところなのであります。』

しかし私は思うに、この大学生達もスポーツについては、オリンピック派遣選手の名前にことごとく通じ、ひょっとすると彼らの陸上水上の最高記録を何秒何分の一の末までそら暗じているかも知れないし、映画については無慮数百人の大小監督、男女俳優の名前と作品と、更に日常の生活や好みの食べものまで知っているかもしれない。彼らに教養がないと人がいうとき、彼らはそれが何を意味するかを解しないかも知れぬ<sup>8)</sup>。

七十年前の「トルストイって何だっけ」が、現今のドストエフスキーをめ

ぐる話とほぼ同じ構造になっているのは愉快なくらいではないか。スポーツ文化や映画は、当時新進のサブ・カルチャーであった。ここで言われているオリンピックが、ナチスによって大々的に開催され、のちにリーフェンシュタールによって華麗に映像化されるベルリン・オリンピックであることは象徴的だろう。「学校外の情操教育としての文学の影響力が近年著しく衰え、これに代ってスポーツや映画が圧倒的に歓迎されつつある傾向」<sup>9)</sup>は大宅壮一も同時期に指摘している。

さらに、谷川徹三の怒りが政治家の「無教養」に及んでいるのも、現代と似ている。「今日局に当たっている政治家達を考えてもよい。彼らの無教養が一般人殊にインテリゲンチヤに今度の政治を信頼させない一つの有力な理由になっている。一国の大臣に向って「あんな馬鹿が」という言葉をわれわれはしばしば聞くのである。それを聞いても人はまた怪しまないのである。そしてこういう言葉はほかならぬ彼らの無教養に向って発せられる言葉なのである」……。

しかし残念だが、いまは学生の「あんな馬鹿が」に話を戻そう。

1936年の時点の大学生たちは、典型的な「事変後の学生」だった。「事変後の学生」とは、1931年の満州事変以後に旧制高等学校や高等専門学校などに入学した世代を指し、当時、この「教養がない」「事変後の学生」向けの教養マニュアルと、彼らの教養低下を分析する学生論・インテリゲンチヤ論・教養論とも言うべきものが大量に出まわったのである。つまり、この30年代は教養崩壊が取り沙汰された時代であり、同時に、にもかかわらず（あるいはそれゆえに）、教養主義の復活時代でもあったのだ。ことによると、あと七十年も経ったら、現代も教養ブームの時代として特徴づけられるのだろうか。

1932年11月に発表された、哲学者・古在由重の「現代学生についての感想」は、最も早い時期に発表された「事変後の学生」論の一つであるが、わずか三頁のなかに、この現象の背景が簡潔に描きだされている。

ちかごろ種々の形をとって現代学生の社会的な本質や傾向についての議論がおこなわれはじめたようにみえる。このことはなにを意味するだろうか。

学生大衆は、ことに満州事変以後、過去において存在しなかったところの新しい社会的文化的条件のもとにおかれた。ある人々は社会運動の沈滞をとまって満州事変以後に高等の学校へ入学した現在の学生たちを「事変後の学生」という名で総称し、一般にかねらの就職問題に対する異常な過敏性と社会問題に対する冷淡な無関心性によって特徴づけている。あるいはまたかねらに共通なものとして思想の欠乏および教養の低下ということが指摘されている。〔……〕

われわれは、一方における思想の欠乏ならびに教養の低下という現象にもかかわらず、なお学生大衆のうちに潜在しているところの社会的批判の力を無視することはできない。われわれは大学の転落を信じるけれど、にわかに学生の転落を信じることはできない、よく知られているように、ドイツの学生の多数はそのたかい「教養」にもかかわらずナチス政権確立以前すでにファシズムへの動向を示していた。

しかるにわが国の学生は部分的な例外を別とすれば、すくなくとも今日までのところ、ファシズム的傾向への誘惑を感じていない。いなむしろ彼らは暗黙のうちにそれへの反発をひそめてさえいる<sup>10)</sup>。

ここにあるとおり、七十年前の教養崩壊の背景は、世界恐慌に続く不景気とマルクス主義思想の弾圧、そしてのちに昭和十五年戦争期と呼ばれるファシズム時代への突入であった。敗戦後に丸山眞男をはじめとする多くの論者たちが指摘する日本の特徴、つまり日本のインテリ層は、ドイツの場合と異なり、ファシズムに協力しなかった、いや、むしろ消極的に抵抗さえしたということが、すでに戦前、こうした学生論で繰り返され主張されていたのは、注目に値する。古在由重の文章は、その先駆けでもあった。

論文が発表された半年後の1933年、古在由重は治安維持法違反で逮捕



されるが（「学生大衆」というのは、もちろん左翼的な表現である）、この年の小林多喜二惨殺と佐野・鍋山転向宣言ののち、30年代中ごろには左翼勢力はほぼ壊滅状態となった。こうしてマルクスを知らない、あるいは知っているが知らない学生が誕生する。と同時に、中国大陸侵略の効果があらわれて軍需工場を中心とする景気回復と就職状況の好転が見られたという。のちに「小春日和」とか「文芸復興」とか呼ばれる時期であるが、これが教養論ブームと重なる。太平洋戦争がはじまり、総力戦体制になっていく40年代に入ると、学生の教養低下などと呑気なことも言っていられなくなるのは当然だろう。「事変後の学生」は、すぐれて1930年代的なものであったのだ。

教養マニュアル本の代表格であった『学生叢書』シリーズは、河合栄治郎の編集で1936年12月に第一巻『学生と教養』が出されたあと41年までに十二巻発刊されたが、よく知られているように、思想善導教授であり戦闘的自由主義者であった河合教授は、政治の季節のあとに呆然とする「事変後の学生」たちに人文的教養を与え、彼らをファシズムの誘惑から守ろうと奮闘したのだった。当時の出版元の編集者に拠れば「これは予想外に歓迎され、増刷をかさね、一種のベストセラーになり、続刊のものも重版しないものはなかった」<sup>11)</sup> という。

### 3.

ここで、最初の教養低下世代であった「事変後の学生」に、実際に誰が属しているか見てみよう。その筆頭となるか、あるいはぎりぎり「事変後の学生」にはならないかで分かれるところが、1914年生まれで、満州事変のあった1931年に第一高等学校に入学する丸山眞男である。1931年から1941年のあいだに十八歳前後であった若者の生年は、だいたい1915年から25年くらいになるが、この世代を「事変後の学生」と呼んでよいだろう。

すると、これはそのまま、いわゆる「戦中派」と重なってしまう。「戦中

派」とは、昭和十五年戦争期に、さまざまなかたちで「動員」された世代であり、と同時に、まだ若かったために直接戦争にたいする責任を感じないですむ世代でもある。要するに、彼らは敗戦後には、「事変後の学生」ではなく、被害者たる動員世代に昇格（？）してしまったのだ。しかも、この動員世代のエリートたちは、かつて「事変後の学生」に教養と献身とを説いた、より年長の世代、たとえば1890年前後に生まれたオールド・リベラリストたちの戦争責任を激しく追及することになる<sup>12)</sup>。こうして因果は戦後にめぐった。

このような話は普通、世代論と呼ばれるわけだが、橋川文三は「我国において、いわば近代的世代論が初めて現われたのは、昭和十年前後の解体的状況の中であつたと私は考える」<sup>13)</sup> と言う。「事変後の学生」の教養低下論もまた、この時期にあらわれた世代論の一つであつたと見ることができる。

1922年生まれで、39年に一高に入学した橋川文三は学徒出陣を体験したわだつみ学徒のひとりであり、丸山眞男の一番弟子であるが、妙に世代にこだわり、「戦中派」を、その教養（崩壊）の在り様によって、さらにシツコク前期・中期・後期に分けている。

まず、前期は「東大の丸山眞男先生などがその一つの典型」である、ぎりぎりのところで「マルクス主義を中心とする社会科学の洗礼を一般に十分に受けることのできたグループ」である。中期には橋川文三じしんが属するのだが、「なかなか悲喜劇的世代でもあったわけです」と自嘲的に言う。「マルクス主義を知らなかった」「このグループは、なんらかの型をもつというには不幸すぎる時期に精神形成をやったわけで、その読書体験などというもの、むしろ混沌としてわけがわからないものだったといえましょう。〔……〕合理主義から実存主義ないしは神秘主義にまたをかけたような滅茶苦茶な範囲がこのグループの教養の範囲であつたわけです」。さらに「戦中派」後期というのは、「世界観とか、人生観とか弁証法とか、歴史観とか、そんなしゃらくさいものは、彼らにはよけいな知的遊戯でしかなかった」「熱烈な少年愛国者」（傍点原文）たちの世代で、「吉本隆明さん〔1924年生まれ〕など、

私などに比べれば後期に入るのかもしれませんが<sup>14)</sup>。

因みに、橋川文三のように、まるまるこの「事変後の学生」に属してしまう論客を挙げておくと、日高六郎（1917年生）、加藤周一（1919年生）、大西巨人（1919年生）、梅棹忠夫（1920年生）、鶴見俊輔（1922年生）などがそろっており、丸山眞男を抜かしたとしても、むしろ何だか怖そうなのである。

1936年に一高に入学した加藤周一は、まさに教養マニュアル本の『学生叢書』が出まわりはじめたころの「事変後の学生」であるが、あんな怖い顔の加藤が『学生叢書』を読んでいたとは到底考えられない。加藤じしん、終戦直後の46年、「戦争の世代は、星菫派である」という文章ではじまる、きわめて批判的な「事変後の学生」論を発表しているので、自分の世代のていたらくには敏感であった。加藤周一は続けて言う。「詳しく云えば、一九三〇年代、満州事変以後に、更に詳しく云えば、南京陥落の旗行列と人民戦線大検挙とに依って戦争の影響が凡ゆる方面に決定的となった後に、二〇歳に達した知識階級は、その情操を星菫派と称ぶに適しい精神と教養との特徴を具えている<sup>15)</sup>。しかし、ここで加藤に批判される、お星様とお花を愛する高学歴者たちの低レベルぶりは、せいぜいリルケやヘッセやカロッサどまりで、『学生叢書』にまでは下がっていない。

同じく1936年に三高に入学した梅棹忠夫になると、『三太郎の日記』や『出家とその弟子』といった教養主義の定番にたいしてすら「それらの本に対しては通俗教養書という印象を持っていました。ほんとうの知識人が読むものとは違うんだという感じが、私には多少あったのかもしれませんがね<sup>16)</sup>」と言っているくらいなのである。

いままで『学生叢書』の名を挙げながら、その内容について触れなかったが（そして今後も触れないので）、これを夢中で読むなんて、たとえば現代の東大生なんかと比べて格段に教養があり読書家であり真のエリートであったと懐かしがられる旧制高校生たちも案外たいしたことなかったのだろうかと思わせる、とだけ言っておこう。あるいは、蓮実重彦風に言えば、ここで

見てとるべきは、年少者に教養を説きたがる年長者の精神状況のほうなのかもしれない。いずれにしろ、教養低下の対抗策であった『学生叢書』は、同時にみずからが当時の教養低下を証明する貴重な資料となっているのだ。

だが、これらは非難の言葉ではない。はじめからそのようなものとして企画されたのが、『学生叢書』なのであり、むしろ執筆者たちの、時には陳腐にも見えてしまう危険のある啓蒙家に徹するすがすがしさこそ称賛に値するだろう。

1940年6月10日号の『帝国大学新聞』には、「現代高校生を語る」と題した、旧制高校や大学教師の座談会が掲載されているが、東京の「某高校教授」は、『学生叢書』についてこう述べている。「別に興味をもって或る方向に進んでゆこうというのではない、学生の常識として読むので……又中には一一そういうものを非常な感激をもって読んでいる（笑声）そういうものもあるんです、何か少し慌てているようなところもあるんじゃないかと思うんです、「学生シリーズ」なんかそうだと思うんです」。その言葉に、進行役の帝大生がすかさず相槌を打って「あれを読めば日常の話題に困らないという一つのあれだろうと思うんですが」と応える。大衆のベストセラーにたいする悪意があるとも思えず、シリーズの内容に照らしてみれば、当時の受容の様子をむしろ的確に伝えていると言える。

さらにここで、1918年生まれでやはり「事変後の学生」であった中曽根康弘（静岡高・東大法・高文試験八番合格）の思い出記（『日本経済新聞』1975年7月6日号）を紹介しておくと、だいたい『学生叢書』の輪郭をつかめるだろう。中曽根自民党幹事長は、「軍国主義」と「超国家主義」の嵐が吹きすさぶなかでも決して「時流に押し流されない澄んだ眼」をもちつづけた河合栄治郎の著作を、どれほどの「驚き」をもって読んだかを記す。「敗戦後、私は政治家を志したが、その行動の根底に〔河合栄治郎著の〕「学生生活」によって触発された自由と民主主義の思想があったことは否めない。自民党の思想の源流の一つは案外、こんなところにあるのかもしれない」……。

## 4.

大西巨人の特異な軍隊小説、あるいは内務班小説、あるいはまた全体小説とも言うべき『神聖喜劇』の主人公、東堂太郎二等兵も「事変後の学生」のひとりである。膨大な引用と想起に満たされた全五巻に及ぶ長編小説の細部の豊饒を説明するのは不可能に近いが、描かれているものは、1942年の冬、対馬の連隊に教育召集された二十二歳の青年が経験する三ヶ月間の内務班生活だ。この馬鹿げた戦争で犬死すべきであると考えていた「我流虚無主義」者、東堂太郎が、まさしく教養と博覧強記とを武器にして帝国陸軍の馬鹿ばかしさと闘っていくなかで、「私は、この戦争を生き抜くべきである」へと転心していくさまは、月並みな表現だが、何とも言えぬカタルシスをもたらす。

だが、いまは「事変後の学生」に視点を絞らねばならない。主人公は、自分の高校時代に当たる1930年代中ごろの時代を「青春世代の思考・行動に多様な「異色」が発生した」時代として回顧し、われわれもすでに見た、例の「トルストイって何だっけ」ではじまる、谷川徹三の論考の一部分が、「青年層（の教養蔑視ないし無教養）を対象として」書かれた代表的論文としてここでも引用される。1919年生まれの東堂太郎は、二年の飛び級を経て1934年にF（福岡）高校に進み、37年に東京帝国大学文学部に入学したあと九大法学部に転学、その在学中に「左翼反戦活動」のために逮捕され退学処分となる。

東堂太郎が、このみずからの学生時代を思い出すきっかけとなったのが、「おなじ年ごろであり、あまり遠からぬ過去の一時期までおなじような成長勉強行路を通してきたと私には思われる青年同士・知識人同士である」村上少尉の存在であった。「将校てろ准尉てろちゅうても、あんまりろくな奴はおらんばってん、村上少尉は別ぞ。ありゃ立派な人じゃ。〔……〕村上少尉殿は、『一日も早う南方前線部隊に転属されてくれ。』ともうだいぶん前から上部に熱心に願い出とらっしゃるちゅううわさじゃけん、近いうちにそのとお

りになるじゃろう。戦争じゃあげな人が早死にをしてしまうとじゃあるめえかねえ」と、いつもは口の悪い古兵すら、村上少尉の「質実剛健」と「清廉潔白」をほめちぎる。

村上少尉は、第五高等学校を二年生の時に突然やめて陸軍士官学校に入りなおしたという変り種の職業軍人である。主人公は、村上少尉の針路変更が、学生の虚無と怠惰と無知とが叫ばれた「事変後の学生」という現象に対抗するようなかたちで敢行されたはずだ、と推測する。「それは、私の「広義理想主義的魂」が多少の曲折を通して我流虚無主義に変貌したのと裏表のように、彼の広義理想主義的情熱が相当の起伏を経て帝国職業軍人の道へ、「筆ヲ投ジテ戎軒〔戦争〕ヲ事トス」の方向へ、異色の転回を遂げた、ということの意味するのではなかろうか」。

しかしながら、われわれにとって重要なのは、この闘う「事変後の学生」たる東堂太郎や村上少尉ではなく、『神聖喜劇』における第三の、そして正真正銘の「事変後の学生」なのである。

東堂太郎の内務班には、東堂のほかに「帝大出」がもうひとりおり（東堂は中退なのだが「帝大出」と呼ばれてしまう）、その「帝大出」谷村二等兵は第五高等学校のときに村上少尉と同学年であった。谷村は、五高を経て東京帝国大学経済学部を卒業後、三井鉱山株式会社の「高級サラリーマン」となっているが、軍隊ではとにかく要領よく切り抜けていくことが大事と、上官にせっせと「猫這い」（阿諛・迎合）している。

だが、「俗物谷村」は谷村なりに、毅然とした東堂太郎を前にして内心忸怩たるものを感じているらしく、「東堂のように、はっきり拒絶したら、そりゃすっきりはするかもしれんが、なんとしても、ここは軍隊だからね。〔……〕われわれ学校出から見れば、理に叶わないような・阿呆らしいようなことが、たしかにたくさんここにはあろうさ。だけど、そんなことにいちいち目くじらを立てても、始まらないだろう？」とぼやきもする。

谷村の気弱な言葉にたいして、「「なんとしても、ここは軍隊だからね。」などとお前は、もっともらしくぼざいているが、お前の「地方」〔軍隊の外の世

間)での生き方も、おおかたおなじじゃないのか」と思う東堂太郎が、基本的には善良な若者である谷村二等兵にたいして、とりわけ厳しく接するのは、次の理由による。

……この谷村のような人間も、世の中にちょいちょい存在するのである。その類の人間は、「悪」または「不正」または「権威」にみずから加担するか追従するかしているくせに、彼における「面従腹背の苦衷」とか「良心の痛み」とかいうような物を（「悪」または「不正」または「権威」にたいする反抗者・不服従者にむかって）こそこそ訴えたり、ぼそぼそ匂わせたり、したがる。私の悟性は、私自身のそういう見方・考え方に私における「狭量」なり消極的「狷介」なりをわずかに内観しなくもない。しかし、わたしの感性は、その類の人間を、「悪」または「不正」または「権威」への積極的な（恥も外聞もないような）加担者・追従者をよりも、いっそう強く嫌悪（むしろ軽蔑）しがちである。

さらに、谷村の婚約者の父親が「幾つもの会社の取締役やら監査役やら相談役やら会長なんか」であり、その会社のサラリーマンでいまは召集されている少尉が「谷村の嫁御の親父に言われて、谷村を聯隊本部に入れて楽な事務勤務にすると画策したとじゃそうな」という話を東堂太郎は聞く。「その親父の采配で、谷村の家から、これまでも、隊長、准尉、教官、副官なんかにゃ、相当なお使い物が送り届けてある」ということなのだ。

谷村の「猫這い」を眺める東堂太郎は、「これらの「学校出」連中は、こんな無教養の下衆どもになるために、莫大な金を払って大学にまで上がったのであったか」と思う。ここで言う「無教養」とは、戸坂潤や三木清の言い方と同じように「無批判」を意味するのだ。

谷村二等兵、この典型的な「事変後の学生」はまた、典型的な「サラリーマン」でもある。もっとも、谷村二等兵の経歴を見ても分かるように、この

サラリーマンは現在のサラリーマン層より狭い中流階層を指しており、帝大などを卒業後、たとえば三井や三菱財閥系の大会社に勤めたような男性たちであった。「戦前はサラリーマンの就労人口に占める割合は一〇％を越えなかった。その限りサラリーマンは近代的セクターの職業として憧れの職業だった。サラリーマンの別名は「インテリ」や「知識階級」であり、都会のハイカラ階級だった」<sup>17)</sup>と教育社会学者の竹内洋は説明している。

ところが、この日本の「知識階級」が、旧制高校や大学で教養の洗礼を受けているにもかかわらず、サラリーマンになってしまうと奇妙に反知性主義的な態度を取るということが問題なのである。これは、本当によく批判されることで、内容じたいよりも、指摘の頻度のほうが日本の特徴となっているくらいだ。谷村二等兵風に言うと、会社のなかでは「学校出」の教養なぞ振りまわしたら、かえって人間関係がうまくいなくなり、世渡りにはマイナスになるという認識があるわけだ（これが事実かどうかは、とりあえず問わないでおく。谷村よりも、我らがヒーロー東堂太郎のほうが案外、軍隊でも愛されているのだ）。

この「無教養」ぶりは天下の官僚にもあてはまるのではないかと英文学者の中野好夫は嘆いた。「実際『教養のための読書』というが、もしわれわれが単に社会に立って、与えられた職業を適当に処理して、栄達の途を歩むだけの目的ならば、読書などはいくらも必要なものではないのである。私の知っている少壮官吏などでも、やむを得ない専門の読書以外には精々サンデー毎日、週刊朝日か、講談社級が行きどまりで、あとは酒と女相手に勝手な法螺を吹いていて、これでどうして平凡どころか、天晴れ能吏振りを発揮しているらしいのである。早くいえばこれでも結構すむのである」<sup>18)</sup>。念のために断っておくが、これは1939年の文章であって、現在の話ではない。

「事変後の学生」論がまず問題にしたのは、大学生がすでに学生のうちから、功利主義的なくせに自分を磨く努力をしない（と批判される）サラリーマン化してしまったということだった。三木清の「知能低下」論のなかに登場する有名な言葉を使えば、「キング学生」（「学校の課程以外には〔大衆雑誌



の「キング」程度のものしか読まない学生」）や「高文学生」（「高等文官試験にパスすることを唯一の目的として勉強する種類の学生」）のキャンパス跋扈である<sup>19)</sup>。戸坂潤は『思想と風俗』（1936）のなかで「学生は変わったか」と問うて、こう述べている。「七八年前の学生は必ずしもサラリーマンの候補者ではなかった。少なくとも自信のある学生は自分の未来にもう少し自由な活動分野を空想することが出来た。そこには創意を充たすだろうような理想を空想することが出来た。今では夫が<sup>それ</sup>ないのだ。学生生活はサラリーマン生活の予備校に過ぎなくなった」<sup>20)</sup>。

このようにサラリーマンや官僚が（時には不当と思えるほど）貶められても、何となく納得できてしまうのは、一旦、サラリーマンの世界に入ってしまうえば、教養なぞ必要ないし役にも立たないと、現在でも思いこまれているからではなかろうか。つまり、ここから見てとれるのは、一人ひとりの高級サラリーマンや官僚が「無教養」かどうかではなく、日本の世間そのものが実は異様なまでに反教養主義的だということなのである。

## 5.

教育社会学者の荻谷剛彦は、日本では他の先進社会と異なり、高学歴は「実力」を反映していないという考え方から来る「学歴社会批判」が大いに好まれる、と指摘する。この場合の「実力」とは、職業上の有能さや役立ち具合を指しているのだが、たしかに、こうした「学歴社会批判」は、いまでも時おり、学者の側からも非学歴保持者の側からも楽しそうに提出されるようである。学校を経ずして、しかし実用に優れた田中角栄的人物への称賛と、「学校出」の無能ぶりへの揶揄は、大衆的人気を保っていると言えるかもしれない。

「ところが、教育が直接的に職業的な能力にかかわらなくとも、それが教養を高めるものであるという点に照らして、高度な教育を受けた人びとは十分尊敬に値するとみる教養主義的な見方が強い社会もある」と荻谷は言う。

イギリスが例に挙げられているが、もちろんドイツにも当てはまるし、西欧諸国はたいてい、この意味での「教養主義」国であろう。いや、西欧だけではない、と荻谷は続ける。「日本と同じか、あるいはそれ以上に受験競争が激しいといわれる韓国でさえ、イギリスとは文脈が異なるものの、高学歴者は、実学より虚学に価値をおく儒教的教養主義に守られているという。それゆえ韓国では、学歴の高い人びとに対する敬意の念は、日本以上に強いといわれるのである」<sup>21)</sup>。

「擬エリート主義」という言葉を用いて、荻谷と同じような主張をしているのが、『新中間大衆の時代』の著者として知られる社会学者・村上泰亮である。戦前日本の旧制高校・帝国大学という高等教育システムも結局は、理念に基づいてエリート教養人を育てることをしなかった、と。「象徴的な一例をとれば、旧制の第一高校のずばぬけて高かった威信は、厳選された統治エリート候補生の学校だという点にあって、明確な教育理念やカリキュラムや教授法にあったのではない。戦前日本のエリート型教育の基本型は理念を欠いた実用教育なのであり、その中で最も非実用的な部分であった旧制高校も、たかだか擬リベラルアーツ的といえるにとどまったのである」<sup>22)</sup>。

何だか、だんだん憂鬱になってくるが、これは日本社会批判というより、急激な近代化の過程で、教養への東洋型尊敬の伝統も失い、しかし西洋型尊敬のかたちも獲得できなかった我が国の悲しい特徴の一つなのである。

教養崩壊は一日にして成らず。

近代日本のはじまりの時点ですでに孕まれていた問題、つまり教養主義が実は近代日本にはまったく馴染まないものであったことが、1930年代に顕在化し、そしてこれは本拙稿では扱わないが、戦中戦後の食うや食わず、生きるか死ぬかの修羅場なかで、ふたたび一旦、隠蔽されることになったのである。

なぜ、近代日本がそのはじまりの時点ですでに教養から遠く離れたところにあったのかは論じ尽くされてもいるのだが、われわれの文脈のなかで、すこし整理してみよう。要するに、明治日本が学歴エリートを育てるための教

育システムを、西洋諸国から導入したときには、すでにかの地においては教養の地盤が崩れはじめていたのである。

科学史家の中山茂が指摘しているように、1886年創立の帝国大学がドイツの大学を真似てつくられたというのは誤解であり、大日本帝国がドイツ帝国から輸入したのは、大学の理念ではなく、国家が官僚や人材を養成するという考え方だけであった<sup>23)</sup>。日本が帝国大学をつくろうとしたときには、欧米諸国ではすでに工業化がすすみ産業資本社会・大衆化社会となりつつあったわけで、焦る日本としても、いまさら、人文的教養を主眼とするドイツの高等教育システムを真似てもいられなかったのだ。いや、そもそも本家本元のドイツ帝国でも、大英帝国を抜きつつある工業生産力をさらにアップさせるために、ギムナジウムに実学教育を導入しようと改革がすすめられていた。ヴィルヘルム二世になると、みずから音頭をとって工学や技術開発の発展に努める。

こうして、はじめから実学を中心とせざるをえなかった帝国大学は、ドイツでは総合大学の外に放逐されていた工学部を、大学の内部にしっかり組みこんだのである（しかも現在でも、東大や京大の工学部の学生数は突出している）。ドイツの大学では、哲学部（文学部）が、大学の理念を担う教養を伝授する学部として、すべての学部の上に位置づけられたのにたいし、我が国では、急速な富国強兵には役立たない人文科学を扱う文学部は軽んじられ、文学部をもたない帝国大学も存在した。

そのかわり、旧制高校のカリキュラムでは人文的教養が重んじられたとは、よく言われることであり、また事実でもあるのだが、旧制高校の授業時間数の三分の一以上を占めた西洋語学教育が、当時としてはまさしく実用教育であったにもかかわらず、同時に教養の香りを伝授する科目となりえたのは、近代日本ならではの皮肉であろう。

そして、これもしばしば指摘されるように、旧制高校の教養主義にとって、より重要なのは、カリキュラム外の読書であった。教養は帝国大学ではなく、旧制高校に在った、というよりも、「理念を欠いた実用教育」（村上泰亮）を重

んじた日本のエリート教育は、教養を学校のカリキュラムの外に出してしまったと言ったほうがいい。真の教養は学校の勉強の外にあるというこの了解が、日本的教養主義の第一の特徴をなしている。三木清を大いに嘆かせている「キング学生」や「高文学生」は別に学校の勉強をさぼっているのではなく、彼らはむしろ優等生なのだ。

それでは、「理念を欠いた実用教育」とは具体的にはどういう意味なのか。それは、社会に出てすぐに役立つ学問を与えるということでは、残念ながらなく、誰もが知っているとおりの、専攻した学問にかかわりなく就職する心構えを植えつけるということなのである。

たとえばドイツ帝国では、1880年代にはすでに法学部の大学卒業生が過剰になっていたが、彼らが誇り高き教養市民として法曹界に入るか官僚になることしか考えないせいで、大量の学卒失業者が生みだされ、やがてはドイツ最大の悲劇につながる世代対立の火種となった<sup>24)</sup>。

それにたいして、我が日本の大学卒業生は、「理念を欠いた実用教育」のおかげで、企業のサラリーマンという一兵卒になることを厭わなかったのである。それを厭うてはならないと当時の就職マニュアルは教えた。「官界でも実業界でも同じであろうが、あらゆる方面に著しく組織の完備を見るに至った今日、最も数多く、最も必要を感じているものは、実務上の将校階級ではなくて、飽くまでも下士であり、兵卒である」(壽木孝哉『就職戦術』1929)。

「東大と京大の卒業者で、官吏となったものに対する実業界に入った者の比率は、明治三十年代半ばから四十年代にかけては四〇％であったが、大正初期には約八〇％となり、第一次世界大戦の終るころには逆転して、一四〇％になった」<sup>25)</sup> というように、西欧諸国に比べ日本の大学卒は早くに企業に進出し、またこだわりもすくなかったと、よく指摘される。しかし、官吏もサラリーマンもそう変わらずに、不屈の一兵卒魂を掲げたことのほうが、重要なのだ。一兵卒には、とりあえず教養なんて要らない。

## 6.

というわけで、教養の天敵は就職問題であった。これはしかし、就職難だけを指しているのではない。バブル期の就職狂想曲はまだ記憶に新しいが、好況は好況なりに学生を翻弄するだろう。古在由重の「事変後の学生」論が言うように、若者の「就職問題に対する異常な過敏性」が教養低下の最大の原因であったのだ。

このことは反対に、旧制高校という、受験からも就職からも一時的に解放された場所を、特権的な教養の楽園もしくは緊急避難所に押しあげたわけだが、そのことには触れまい。

昭和初年の大恐慌から戦争とファシズムの坂道へとつながっていく1930年代は、大卒の就職問題がいままでにないかたちで露呈した時期だった。まずは、『大学は出たけれど』(1929)という題名をもつ小津映画が示すような、空前絶後の大就職難、というか大失業時代、そして30年代の中ごろにはじまる「満州景気」に因る就職状況の変化である。つまり、文系大卒のエリートも、官庁・銀行・商社より下に見られていた工場や鉱山（とにかく鉄鋼業がますます重要産業となる）の事務職に就くことに、ついに承諾したのだった<sup>26)</sup>。東大経済学部卒の谷村二等兵が三井鉱山株式会社のサラリーマンなのはなかなか現実味ある設定なのだ。

『立身出世の社会史』（邦題）の日本語版への序文のなかで、キンモンス教授が、日本のインテリはファシズムにたいして「受動的に抵抗」したという説に疑念を示すとき、もちだされる論拠は、やはり就職問題なのである。「当時の就職に関するさまざまな記録を通覧していくとわかるのは、侵略に関与したり、侵略から利益を享受していた組織や企業への就職を、大学卒業生たちがいやがったという証拠がどこにもないということである。むしろ全く逆である。日本のアジア侵略に深く関与していた満鉄や、さまざまなシンクタンクは、当時のエリート学生にとって最も人気の高い就職先であった」<sup>27)</sup>。就職を嫌がりとはしなかったが、それでも（心のなかでは）やはり消

極的に抵抗していたのだ、とわれわれなら簡単に納得できるのだが……。

キンモンスの著作は from Samurai to Salary Man という副題をもち、日本のエリートたちがサラリーマンとなり、サラリーマンとして出世するために何をしてきたかを考察している。サラリーマンの心性は、近代日本の一つの特徴をあらわすものだからである。

そして、この、いわゆるサラリーマン根性が、丸山眞男によって指摘された日本の戦時指導者たちの「矮小」性（責任逃れと決断力の欠如）とも結びついているというのだ。「封建遺制」を引きずる大英帝国と違って、「民主的な」大日本帝国では、エリートは、出自を問われない学歴エリートであったから、自分の地位を奪いうるライバルはつねに過剰に存在し（「東京帝大法学部の卒業生のような、エリート中のエリートですら、その人数は、官界や実業界が欲するよりも多かったくらいである」）、不用意な一言や態度で、すぐにその地位を奪われてしまう危険があった、とキンモンスは言う。もし、その地位を失っても平気なぐらいの知識や技術をもっているとか、生まれつきの地位や財産があるというなら、自分の経歴や地位を賭しても大義をつらぬいたり、責任を引きうける覚悟でリーダーシップをとったりするであろうが、日本のエリートの場合、そのようなことは起こりにくかった、と。キンモンスが日本のエリートを「サヴァイヴァー」と呼ぶとき、日本人なら誰でもいくぶん気分が滅入るだろう。勝ち組は闘う人ではなく、じっと我慢の生き残り組であったのか<sup>28)</sup>。

そして、サラリーマン体制のなかで生き残るためにもっとも大事なのが、パーソナリティ人柄であり、対人関係というわけなのだ。早くも明治40年ころから、欧米に先駆けて、人間関係や交際術の重要性を説く書物が、高学歴者向けにも出まわりはじめたのは、もともと日本の道徳に他人志向的なものがあった（つまり西欧的個人主義が未発達であった）からというより、日本における就職問題の大きさのためではなかったか、とキンモンスは推測する<sup>29)</sup>。

繰り返えし言うておけば、（官僚も含む）高級サラリーマン稼業において本当に人柄が一番大事なのかどうかは、ここでは問わない。そう信じこまれ

ていることを問題にするだけである。竹内洋京大教授などは、現代社会ではむしろ「奇人や変人」のほうが「これからの人材」となっており、「日本的経営（サラリーマン型人間像）の隠れたカリキュラムによって要領と人づきあいだけが取り柄の人間への社会化をなしてきたフツウ人とフツウの若者」は「未来に対する漠とした不安感」を抱いているはずだと（爽快な）指摘をしているくらいなのだ<sup>30)</sup>。

昭和初年に戻ると、このころ大学生向けの就職戦術論が大量に出現したという。曰く「就職戦線めがけて」「就職哲学」「応用就職戦術」「彼れは斯して就職せり」「これからのサラリーマン成功法」……。三木清は、先に引用した『現代学生論』の序文で、「固より我々は諸君に対して職業的訓練家の如く語り得ないであろう」と断っているが、尾崎盛光のまとめに拠れば、これらの「職業的訓練家」が説くのは、もちろん、教養の大切さではなく、実務能力と人間関係における「スマートさ」（これは当時、昭和モダニズム時代に使われはじめた新流行語だという）である<sup>31)</sup>。

1933年5月号の『文藝春秋』に、「現代大学生気質」と題して東京帝大生の大石文雄君が一文を寄せている。大石君は、ダンスだバー通いだ有閑マダムのお相手だとスマートな遊び人の多くなった東大生の変貌を描いて、「その昔某閨秀歌人を嘆ぜしめたように、一様に『ドンヨリくさくてヂヂむさい』カマボコ帝大生ばかりであった時代は実は帝大の黄金時代でもあったわけ」だと懐かしがる。

彼等は学校へ出席しないかわりに麻雀にダンスにシネマにゴルフに没頭する。かくして一九三三年には文学部の就職志望カードの得意技能欄にダンスなどと記入する向も出たという。こんなのは大抵思想の方は大丈夫だろうと採用側にも安心を与えて存外効果的だったりするだろう。実際サラリーマンを志す学生にとって学の蘊奥などはどうでもいいのだ、ロボットの如く働いてくれる人間が要求される、この間の消息に通ずる学生は麻雀にダンスに身をやつすのであるが、そうしながらも卒業後の

就職難には絶えずおびやかされて、ひょうたんみたいに青ざめてこせこせして居り、御都合主義であり、いつも最小抵抗線に沿って流れて行こうとしている。

これは現代の東大の実態ではなく、七十年前の話である……念のため。大石君は最後に「此の年の三月、卒業式の当日も総長は燦然たる豪華な大講堂で、晴れて巣立とうとする二千人の新卒業生を前に、学士の就職難について欧米諸国の例まで挙げて就職難の話のみ二時間に渡って長講舌を振るわなければならなかった時代である」と嘆きもしている。

ちょうど七十年後の2003年9月号の『エコノミスト』に、話題となった『不平等社会日本』(2000)の著者・佐藤俊樹東大助教授が、東大のキャンパスから、もっさりした「ガリ勉」が消えたと報告している(もっとも大石君に拠れば、すでに七十年前から絶滅瀕種だったわけだが)。

佐藤の論考は「「ガリ勉」の絶滅は新たな不平等社会の象徴だ」と題されており、要するに「ガリ勉は、本質的に他人と付き合うのが苦手」なので、現代のような「対人コミュニケーション能力」が職場において決定的な意味をもつ社会では、就職にも出世にも不利になっている、というのである。この「ガリ勉」君は、かつての日本では、出身家庭の貧しさを挽回するために努力に努力を重ねる苦労人型の成功者にもなりえたのだが、現在では「知的・文化的水準の高い家庭環境」でのびのびと育ち、スマートに他者とつきあえる人間が「就職試験の面接や、商談の場、職場などで人に好印象を与え」て万事にうまくいくことになっている(らしい)。言うまでもなく、東大助教授はそうした「出身家庭という「機会の不平等」とそれを放置する日本社会を嘆いているのである。「夏の夕暮れ、ガリ勉の消えたキャンパスをぼんやり眺めながら、私は考え込む」……。

同じく東大助教授の玄田有史は『ジョブ・クリエーション』(2004)の結論部分で、「若年のフリーターや無業者の増加が社会問題となるのは、能力機会の開発もさることながら、人間関係の形成力、もしくはコミュニケーション



ンに多大な労苦を感じる若者が増えてきていることにこそ、深刻な実態がある」と憂え、とにかく広い人的ネットワークをもつことが、就業のためには大切だと言う。「しかし、人的ネットワークといっても、血縁などによる縁故などの人脈をもつことが、就職を有利にするという状況は弱まりつつある。それよりは、仕事を通じて知りあった取引先との信頼関係の継続や、会社生活の枠を超えて個人が自分の意志でボランティアやNPOといった活動に参加することで出会った人々との交わりのなかにこそ、自身の新たな就業可能性を広げる情報が多く含まれている」<sup>32)</sup>。言うまでもなく、この東大助教授もまた、日本の若者の就職難とコミュニケーション能力の低下問題に、誠心誠意取りくんでいるのである。

彼らの社会的正義感や分析的的確さが十分伝わってくるにもかかわらず、東大の若手教師にこぞってこんなこと言われたくないな、とヒガンでしまうのは、日本において人間関係の大切さが繰り返され言われてきたせいであろう。キンモンスに拠れば、明治40年ころからの傾向なので、教師による教養低下嘆息と同じように、ほぼ百年の歴史をもつ。そして、そう言われれば言われるほど、若者たちも落ちこむらしく、玄田助教授が、現代の「ニート」（就職もせず学校にも行かない若者）問題に触れ、ニートたちは働くことの意味や人間関係の大切さを「むしろ過剰なほど考え込んでいる」（『朝日新聞』2004年10月8日号）と指摘しているのは見逃せない（つまり、「人的ネットワーク」をつくろうなどという言説がかえって、圧迫になるわけだ）。

1930年代という、就職面で新たな局面を迎えた時代に学生たちに教養を説いた本は、就職マニュアルとはまさしく対照的に、世俗的な対人関係の重要性を取りあげなかった、いや、取りあげようとしなかった。このことは、しかしながら、現代の教養の「効用」にもあてはまる。学力低下と教養崩壊の凄まじさは実は大学以上と言われる文系大学院が、会社や人間関係の煩わしさを嫌った「教養難民の駆け込み寺（教養への逃走）と化して久しい」（傍点原文）と竹内洋は指摘する<sup>33)</sup>。「教養への逃走」は教養崩壊の結果であり、と同時に原因でもあるわけだ。

教養と就職が、このように相反するものであるならば、大学生の就職問題が消えてしまったときには、無垢無償なる教養が熱烈に求められるはずである。そして、実際そのような時があったのだ。

それでは、エリート学生たちの就職問題が消えるというのは、いったいどのような時だろうか。それは、彼らにとって、この先もずっと人生が続いていくという将来が消える時か、あるいは毎日がこのまま同じように続いていくとは信じられない秩序紊乱の時である。こうして戦争末期に、若者が人生二十年と決意（絶望）しなくてはならなかったとき（もう就職のことなんかどうでもいい）、そして敗戦後に、いままでの価値体系がまったく通用しなくなったと思いこまれたとき、教養はかつてないほどの人気を享受したのである。岩波文庫の発売日に、腹を空かせながらも若者たちが本を求めて行列を作ったとか、『きけわだつみのこえ』に見られるように、学徒兵が最期まで哲学書を離さなかったとかは、よく聞くエピソードだろう。

戦争のおかげで、教養が生きのびた！ だが、この悲惨については、稿を改めて論じよう。

註

- 1) 蓮実重彦「「漱石」的な懸念にさからって」『私が大学について知っている二、三の事柄』(東京大学出版会, 2001) 189頁。
- 2) 大塚英志「「エリート幻想」の正体」『論争・中流崩壊』(中央公論, 2001) 220頁。
- 3) Aleida Assmann: *Arbeit am nationalen Gedächtnis. Eine kurze Geschichte der deutschen Bildungsidee*. Frankfurt a. M. (Campus) 1993, S. 105.
- 4) 三木清「序」『現代学生論』(矢の倉書店, 1937) 2頁。
- 5) 戸坂潤「現代学生論の諸要点」同書, 91頁。
- 6) 石田英敬「「教養崩壊」の時代と大学の未来」『世界』(岩波書店, 2002・12) 215頁。
- 7) 丸山眞男『自己内対話』(みすず書房, 1998) 133頁。
- 8) 谷川徹三「教養と文学の世界」『中央公論』(1936・8) 247頁。
- 9) 大宅壮一「類似インテリの氾濫」『中央公論』(1937・3) 289頁。
- 10) 古在由重「現代学生についての感想」『古在由重著作集第六巻』(勁草書房, 1967) 611頁。
- 11) 石堂清倫『わが異端の昭和史 上』(勁草書房, 1986) 187頁。
- 12) 小熊英二「＜民主＞と＜愛国＞ 戦後日本のナショナリズムと公共性」(新曜社, 2003) 196～208頁参照。
- 13) 橋川文三「世代論の背景」『日本浪漫派序説』(講談社学術文庫版, 1998) 198頁。
- 14) 橋川文三「戦争体験と戦後世代」『現代知識人の条件』(徳間書店, 1967) 184～187頁。
- 15) 加藤周一「新しき星莖派」『加藤周一著作集8』(平凡社, 1979) 17頁
- 16) 梅棹忠夫「私の学問人生」『近代日本文化論4 知識人』(岩波書店, 1999) 221頁。
- 17) 竹内洋「サラリーマンという社会的表徴」井上俊他編『岩波 講座現代社会学23 日本文化の社会学』(岩波書店, 1996) 135頁。
- 18) 中野好夫「読書と教養」『現代の教養』(三笠書房, 1939) 186頁。
- 19) 三木清「青年・学生に就いて」『現代学生論』[最初の題名は「学生の知能低下に就いて」] 174～175頁。
- 20) 戸坂潤「学生論三題」『戸坂潤全集第四巻』(勁草書房, 1966) 363頁。
- 21) 荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』(中公新書, 1995) 124～125頁。
- 22) 村上泰亮「大学という名の神聖喜劇」『中央公論』(1988・7) 71頁。

- 23) 中山茂『帝国大学の誕生』(中公新書, 1978) 61～69頁参照。
- 24) Vgl. Johannes-Christoph von Böhler: *Die gesellschaftliche Konstruktion des Jugendalters*. (『青年期の社会的構造』) Deutscher Studien Verlag (Weinheim) 1990.
- 25) 荒川幾男「一九三〇年代と知識人の問題——知識官僚類型について」『思想』(岩波書店, 1976・6) 742頁。
- 26) 尾崎盛光『日本就職史』(文藝春秋社, 1967) 234頁参照。
- 27) E. H. キンモンス (広田照幸他訳)『立身出世の社会史』(玉川大学出版局, 1995) 4 頁。
- 28) 同書, 304～308頁参照。
- 29) 同書, 249～254頁参照。
- 30) 竹内洋『大衆モダニズムの夢の跡 彷徨する「教養」と大学』(新曜社, 2001) 283頁。
- 31) 尾崎, 前掲書210頁参照。
- 32) 玄田有史『ジョブ・クリエーション』(日本経済新聞社, 2004) 330頁。
- 33) 竹内, 前掲書133頁。

#### 註で触れなかった参考文献

- 1. 田中征男「1930年代の「学生と教養」問題への序説」『松山商大論集31巻4号』(1980)
- 2. 渡辺かよ子『近現代日本の教養論 一九三〇年代を中心に』(行路社, 1997)